

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役会長 稲垣 良次

2026. 1
No.389

新年明けましておめでとうございます

2026年は、干支の中でも「丙午（ひのえうま）」にあたり、「事業が発展し、努力が実を結ぶ年」と言われています。

鈴木社長が舵を取る「鈴木丸」も、出航して一年が経過しました。船舶の世界では、

「新造船」はまずベテランが試乗航海を行い、走りながら点検・修理を繰り返して完璧な姿へと近づけていきます。鈴木社長にとっても、昨年はイナテックグループの強さや弱さを目の当たりにした、「試乗航海」の一年であったと思います。

米国大統領任期の4年間になぞらえると、1年目は自分の目で現場を確かめる年であり、2年目は、自身のやりたいことと現状を鑑み、実行計画を立てて推進する年です。

3年目に思いっきり走り、4年目で公約通りの成果を出す。そうして結果を出すことで次の選挙で勝ち、もう一期大統領職を全うできるという仕組みは、経営も同じです。鈴木社長にとつての2026年は、まさに丙午の年のごとく、綿密に計画を立てて新しいことに挑戦すべき年なのです。

私は代表取締役会長として、社長を完璧にバックアップし、共にイナテックグループの未来を開拓していきます。この2026年、健康に留意しながら頑張ります。皆さんも、まずは第一に健康に気を配ってください。その上で、日々の仕事を通して自己成長していただければ幸いです。

本年もよろしく願います。

イナテック版 私の履歴書 No. 9

近畿大学 理工学部での学び

私が卒業した「経営工学科」は、日本では早稲田大学が初めて創設し、続いて近畿大

学でも導入されたという経緯があります。当時は早稲田出身の教授が、私の恩師である羽石先生たちに指導されていました。そのため、私も早稲田大学の情報をよく耳にし、学会や青山学院大学などで一応は学んだ（出席のみですが）つもりでした。

私の卒論は、『日本のIEの探求』というテーマで、諸先輩の論文に加筆したものでした。"IE（インダストリアル・エンジニア）"とは、トヨタ生産方式の土台となる「作業分析」や「行動科学」を学ぶものです。私は稲垣鉄工での現場実習中、少なからずそのような視点や思考を持つて取り組んでいたのだと思います。その他にも「統計的品質管理」や「原価管理」など、細かなことは頭には入ってないものの、考え方だけは残っており、それが現在の経営のベースになっているのかもしれない。

振り返れば、大学生活でムダな時間を過ごした感もありますが、それが人生の何らかの足しになっていることは間違いないと、自分を慰めております。

若芽会 入会

アイシン精機(現アイシン)には、当時、豊田稔会長が創設された『若芽会』という組織があり、現在も引き継がれています。

この会は、アイシン協力会の将来を考え、仕入先の経営者育成を目的としたものです。次世代を担う後継者を育てなければ、アイシン協力会が消滅してしまうという、豊田会長の10年、20年先を見据えた考えから生まれた『学びの会』でした。

活動の中で最も勉強になったのは、豊田会長から「会社に対する考え方」「社員との接し方」「経営者としての立ち振る舞い」などの教えを直接受けたことです。また、指導担当の重役や部長の皆様も、昼夜を惜しまず貴重な時間を割いてくださり、ビジネスの在り方についてご指導いただきました。さらに稲垣工業の稲垣和昭会長様、カリモク家具の加藤英二相談役様、浅賀井製作所の加賀昭成会長様など、素晴らしい先輩方からも、夜の懇親会などを通じて「生の経営問題」を学ばせていただきました。多くの方々に育てていただいたことに、心から感謝しております。

24歳で入会してから40歳までの間、書記、会計、副会長、そして会長と役員を経験させていただいたことは、経営者として人前で話すことの重大さを知る、貴重な機会となりました。

今の私があるのも、アイシン様のご指導のおかげです。改めて感謝申し上げます。

父・邦松氏との経営論争と社長就任

24歳で若芽会に入会し、27歳で美奈子さんと結婚してからは、当然のように米津の自宅で両親と同居していました。当時は会社もさることながら、帰宅後の食事中でさえ、会社の問題で父・邦松氏としつこく親子げんかをしていました。母のみよさんや美奈子さんには非常に嫌な思いをさせてしまったと、今になって申し訳なく思い出しております。

菜根譚後集

一一〇

母偏信而爲奸所欺、母自任而爲氣所使。母以己之長而形人之短、母因己之拙而忌人之能。

片一方だけを信用して、悪だくみする男にだまされてはならぬ。自信過剰になって、から元氣にふりまわされてはならぬ。自分の長所を挙げることで、かえって他人の短所を表面に現わすようになってはならない。自分の無能さによって、かえって他人の才能に反感を持つようになってはならない。

38歳の時、とうとう親子げんかの限界がやってきました。邦松氏と私の二頭政治では、社員の皆さんもどちらの指示に従うべきか判断が難しく、これ以上皆さんに迷惑をかけられないと思った私は、邦松社長に対して『俺に社長をやらせてください』と、自らの退路を断つ覚悟で進言しました。

邦松氏からの返事は、「よし、やれ」の一言でした。それ以来、邦松氏は余分な口出しはせず、私に任せてくれるようになりました。今になって考えると、邦松氏にとっては、我慢という試練との戦いだったのではないかと思う次第です。

私も、鈴木社長にバトンを渡した今、当時の邦松氏のように振舞えているだろうか、後進のために何ができているだろうか、社長の足を引く張っていないだろうか……と、悩みは尽きません。私自身生涯勉強を続け、少しでも年を重ねた分、長老として若い人たちにアドバイスできるよう頑張ります。

今後ともよろしくお願いいたします。